



TITLE:

次世代OPACを考える : 目録情報の視点から  
: 京都大学図書館機構平成21年度第2回講演  
会( 次世代OPAC実装への取り組み : Project  
Next-L Enjuを素材として / 田辺浩介 )

AUTHOR(S):

渡邊, 隆弘; 清田, 陽司; 田辺, 浩介

---

CITATION:

渡邊, 隆弘 ...[et al]. 次世代OPACを考える : 目録情報の視点から : 京都大  
学図書館機構平成21年度第2回講演会. 2009

ISSUE DATE:

2009-11-27

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/108224>

RIGHT:

## 次世代OPAC実装への取り組み Project Next-L Enjuを素材として

慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所  
非常勤講師 田辺浩介

tanabe@mwr.mediacom.keio.ac.jp

## Project Next-L Enju

- Project Next-Lの開発する統合図書館システム
  - 検索・貸出・受入などの業務一式を含む
- 多くのフリーソフトウェアを利用して構築
  - Ruby on Rails, PostgreSQL/MySQL, Solrなど
- Enju自身もフリーソフトウェアとして公開
  - MITライセンス

## Enju開発秘話(?)

- 2009年3月まで、別の大学で図書館の業務を担当
- 蔵書数千冊のサテライトキャンパス
- 図書館システムなし、本館のOPACのみ
- 貸出・返却・予約はすべて手書き
- 書誌データは書店からCSVで受け取り
- 自館のためのシステムがほしい！

## 耐え難い孤独

- 超小規模館、資料も利用者も少ない
- サテライトキャンパスであり、教職員とのコミュニケーションも取りにくい
- 自分の大学ですらそうなのに、まして他大学とのコミュニケーションなんて...
- システムにも接続されず、業界団体の集まりにも行けず
- こんな状況で、何かできることはあるのか？

## 外の世界

- 英語圏の図書館関係(特にIT関係)のWebやメーリングリストを読んでいた
- とにかく話題が前向き！
  - サービス向上のためにどうすべきか、そのためにどんな技術が使えるか、どんな技能が必要か
- 日本でこんな話題や姿勢、聞いたことも見たこともない！

## できない理由はあるのか

- どうしてこんな違いがあるんだろう...
- どうして自分たちにはこんな前向きな話ができないんだろう...
- 自分たちにはこんな「前向きに考える」能力がないのか？
- ただ愚痴るだけで、自分も世の中もなにか変わるのか？

## 世界に目を向ける

- 世界では多くの図書館関係者が議論し、工夫をこらしている
- その議論や工夫がWebやメーリングリストで、誰でもどこからでも読める
- その成果が「フリーソフトウェア」という形で公開されている
- その成果に対して、また新たな議論と工夫が生まれる

## 自分で作ろう

- 英語圏の様子をただうらやましがってはいけない
- 世界中でこれだけやれるのだから、自分たちができないはずがない
- 目の前にはこれだけの議論と成果物があるじゃないか！
- 図書館の設備はどうしようもないが、ソフトウェアならパソコンがあれば作れる

## Project Next-L Enjuの誕生

- 2006年11月、Project Next-L 活動開始
- 2007年の夏頃からプロトタイプを製作開始
- 2008年11月の図書館総合展でEnjuと命名、Enju 0.1を発表
- 2009年11月の図書館総合展でEnju 0.3を発表
  - 初の試験導入館が現れる

## Enjuのふたつの性格

- 小規模館の情報化を進めるための  
図書館システム
- 図書館の世界の明日を考えるための  
図書館システム

## Enjuの主な特徴

- 図書館業務一式をまかなえるパッケージ
  - OPACだけではない
- いわゆる「次世代OPAC」的な機能
  - ファセット検索、ソーシャルタギング
  - 各種のWebAPI
    - RSS/Atom, MODS, OAI-PMH, iCalendarなど
- FRBRモデルの採用

## なぜFRBRモデルか

- 「現実の業務に即しているか」という点は製作段階では考慮していない
- 「明日を考える」ためのシステムでなければあえて一から作る意味がない
- 「新しい目録」の標準になる可能性が高い
- 図書館(と目録)の未来がそこにあると考えるなら、それを採用しない道はない

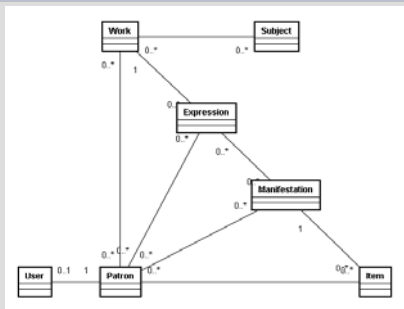
## 動作デモ

- 書誌レコードの作成
  - 図書
  - 雑誌
  - 映像資料
  - コンピュータのファイル

## EnjuでのFRBRの実装(1)

- できるだけIFLAの資料に厳密に
- ただし、多少の簡略化あり
- RDA草案も意識

## EnjuでのFRBRモデルの実装



## EnjuでのFRBRの実装(2)

- いくつかIFLAの報告書と異なる実装をしている部分がある
- Person/CorporateBodyをPatronにまとめる
- Concept/Event/Object/PlaceをSubjectにまとめる
- 実装が複雑になりすぎると判断したのが主な理由

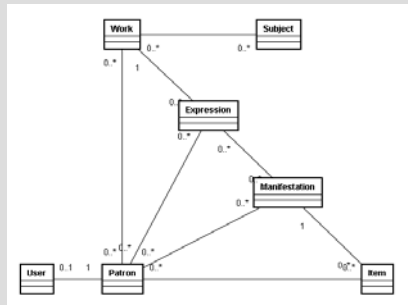
## FRBRモデルに触れた感想

- 大学で習った目録法は「規定の用紙の升目を埋めていく」感覚
- FRBRは「積み木で像を組み立てる」感覚

## FRBR採用で感じるメリット

- 資料と資料の関連を表すことによって「広がり」を表現することができる
- 構造が明確なモデルであり、RDB上で表現するのが容易
- Patron(Person/CorporateBody)が著者・编者・出版者・所有者のどれにでもなることができる

## EnjuでのFRBRモデルの実装



## FRBR採用で感じるデメリット

- Work/Expressionに相当する書誌の問題
- なにをもってWorkとするのか、どこがExpressionに相当するのか
- データの量や入力の手間が増える
  - システムの複雑さや性能にも影響が出る
  - 各館で個別に入力するのは非現実的では？

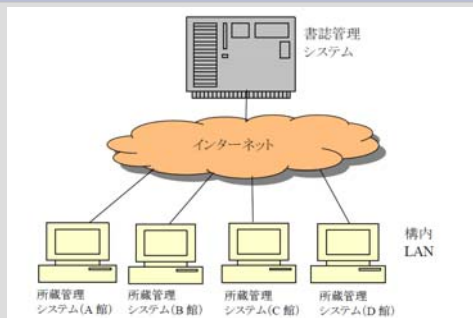
## FRBR化された目録を誰が作るか

- 人手の乏しい図書館では非現実的
- 自動化・集中化は必須
- 「目録センター館」構想との関連は？

## Project Next-L 総合目録

- Enjuを用いて構築する総合目録
  - 現在のNACSIS-CATに相当するもの
- 全国の書誌作成者がログインし、Work/Expression/Manifestationの関連を管理する
- 各図書館ではManifestation/Itemの関連のみを管理する
- 総合目録と各図書館はHTTPとREST APIを用いて通信

## 総合目録の構成図



## 総合目録の動作デモ

- 総合目録上での書誌の作成
- 各図書館での受入作業

## 終わりに

- 図書館システムを考えること  
= 図書館で扱うデータのモデルを考えること  
= 図書館の目録を考えること
- 「明日」をより多くの人々で考えるための  
フリーウェア・オープンソースソフトウェア
- 未来は大きな組織だけで決めることのできる  
ものではない

## Project Next-L 関連サイト

- プロジェクトのサイト  
<http://www.next-l.jp/>
- メーリングリスト・過去の資料  
<http://next-l.slis.keio.ac.jp/wiki/wiki.cgi>
- デモサイト  
<http://enju.slis.keio.ac.jp/>
- ソースコード・インストール手順  
<http://wiki.github.com/nabeta/next-l>